

ベトナム語を母語とする日本語学習者の 「タラ」「バ」の使用実態

Tran Thi Minh Phuong

ハノイ国家大学外国語大学、東洋言語文化学部

受領日: 2012年8月20日, 受理日: 2012年11月25日

レジュメ. 本研究では、ベトナム語を母語とする日本語学習者を対象として、「タラ」「バ」の習得状況と「タラ」「バ」の選択傾向を知るために、文法テストを実施した。結果としては①学習者は母語話者と比べ「タラ」「バ」の選択傾向が異なっている。②上級レベルの学習者は既習した文法項目でも十分習得されていない。③事実条件（発見）、事実条件（時間的順序）仮定条件（モダリティ）の三種類では、事実条件（時間的順序）→事実条件（発見）→仮定条件（モダリティ制約あり）の順で習得が進んでいる。④それぞれの学習者の習得状況には、個人差があるということが分かった。

キーワード: 「タラ」、「バ」、選択傾向、使用実態、ベトナム語を母語とする日本語学習者。

1. はじめに

日本語では、「タラ」「バ」条件表現は日本語学習者にとって難しい学習項目の一つである。文法研究上では、益岡（1993）、宮島（1996）、蓮沼（2001）、野田（2002）など先行研究が多い。言語習得研究では、稲葉（1991）、小柳（1998）、堀（2003）、ソルヴェン（2006）などの先行研究がある。しかし、ベトナム語を母語とする日本語学習者における条件表現の習得研究は管見では見当たらない。本研究では、条件文の形式として、代表的な「タラ」「バ」「ト」「ナラ」の中から、学習者がよく困難する

「タラ」「バ」を取り上げて、考察する。本研究では、「タラ」「バ」の習得状況学習者が「タラ」「バ」の選択をどのように行っているのかを知るために文法テストを行い、その結果に基づいて、ベトナム語を母語とする日本語学習者の「タラ」「バ」の習得過程とその困難点を考察する。

2. 先行研究

2.1 日本語学の観点における先行研究

条件表現は、文法研究上重要な問題として取り上げられている。日本語学の分野においては、益岡（1993）、宮島（1996）、蓮沼（2001）、野田（2002）などがある。

* Tel.:84- 913 299 099
Email: tphuongjapan26@yahoo.co.jp

これらの研究では、「バ」は「一般的」「恒常的」な条件を示す用法や、それと関連してことわざに用いられるという結果が多く見られる。一方、「タラ」は「バ」より用法が広いことが指摘されている。また、「タラ」と「バ」いずれも「仮定条件」に使用されるが、「タラ」は文末モのダリティーの制限がなく「バ」は制限があるという「タラ」と「バ」の相違についても明らかになった。

2.2 習得の観点における先行研究

習得に関する先行研究は稲葉 (1991、子柳 (1998)、スニーラット (1999、堀 (2003)、ウルヴァン (2006) などがある。本研究に関連のあるだけまとめておく。

稲葉 (1991) は「と・ば・たら・なら」という4つの日本語条件文をモダリティー制約の観点から研究している。英語を母語とする日本語学習者の二つのグループを対象として、「モダリティー制約のある」条件文と「モダリティー制約のない」条件文の正否の識別に関する集団テストを行った。対象者は日本で学習している初級後半レベルの日本語学習者 (28名)、アメリカで学習している中級前半レベルの日本語学習者 (17名) の二つのグループである。その結果、「と・ば」のモダリティー制約のない条件文について、どちらのグループも正答率が高かった。稲葉は、モダリティー制約の無い条件文は日本語と英語で共通に成立する項目なので習得が容易であると主張した。また、「バ・たら・なら」条件文は、モダリティーの有無に関係なく文が成立するが、正答率は二つの学習者グループに高かった。一方、「と・ば」のモダリティー制約のある条件文の項目お正答率は低かった。日本語と英語の差異があるために、習得が難しいと結論を下された。

堀 (2003) は韓国語と日本に住んでいる197名の韓国語を母語とする日本語学習者に条件文の習得状況を調査している。学習者に産出テストと適格性判断テストという2種類のテストを実施した結果、「トとバ・トとナラ・バとタラ・ナラとタラ」という条件文の4形式の間に優位な差異があるため、条件文の形式によって条件文の習得は差があるという結論が提示されている。学習環境の違いの影響に関して、韓国語母語話者については学習環境の影響はみられなかった。また、堀は目標言語にも対応する母語にも複数の用法があるとき、それぞれの一つの形式にもっとも早く中間言語が形成されており、それらの用法は重複せず、1形式に一つの意味領域が当てはめられると述べている。一方、中国語母語話者と韓国語母語話者の調査を比較した結果、習得には似た傾向が見られたが、トの文末形式の制約に関しては、韓国語には同じ減少が存在しないので、韓国語母語話者の得点率が低かったと述べられている。一方、タラの場合は中国語の場合は、中国語母語話者と韓国語母語話者共に得点率が低かったということがあきらかになった。

これまでの先行研究では、中国語、韓国語、英語を母語とする日本語学習者を対象とする研究が多いであるが、ベトナム語を母語とする日本語学習者を対象とする研究は筆者が知っている限りでは、一つもないようである。条件表現はベトナム人の日本語学習者は難しい文法項目だと言える。なぜかと言うと、日本語と学習者の母語において、条件表現の用法には差異があるからである。学習者はよく混乱して、使い間違える可能性が高いようである。それで、ベトナム人の日本語学習者の使用実態を明らかにして、「タラ」「バ」の習得過程とその困難点を考察する必要と考える。

3. 研究方法

本研究では、ベトナム語を母語とする日本語学習者の条件表現「タラ」「バ」の習得実態を明らかにするために、文法テストを実施し、その結果を分析して、考察を行う。

4. 研究対象

本研究で扱う「タラ」「バ」は以下のようなものがある。

稲葉 (1991)、蓮沼 (2001)、白川他 (2001)、ソルヴァン (2006) を参考にして、以下の (1) から (5) のように分類しておく。

- (1) 恒常的条件：二つの事柄が自然の法則や社会の習慣など、広く知られているような知識に基づいて表現されるものである。前件が成立するとき、後件も必ず成立する。恒常条件には三つの下位の用法がある。
 - [1] ことわざ・慣用句
例：犬も歩けば棒にあたる
 - [2] 抽象的論理関係
例：男いれば女いる
 - [3] 一般的な真理
例：水は100度になると、沸騰する。
- (2) 仮定条件：ある出来事が起こった場合を仮定して、自分の考えや相手の働きかけを表現するものである。例：明日天気がよければ/よかったら散歩に行きます。
- (3) 確定条件：前件が真になることが分かかっていて、前件が起こることは必然だが、まだ起こっていないので条件の形式が使われる。
例：10時になったら、帰りましょう。

(2)の仮定条件の(3)の確定条件の文については、後件の文末に、意志、希望、命令、依頼など話者の聞き手に対する心的態度を表すモダリティー形式がある場合には「タラ」しか使えない。この制限をモダリティー制約の呼ぶことにする。ただし、前件が状態性である場合には「バ」も使われる。

例：大学に入ったら、きちんと勉強しなさい。

大学に入れば、きちんと勉強しなさい。

寒かったら、窓を閉めてください。

寒ければ、窓を閉めてください。

- (4) 事実条件：実際にすでに起きた二つの事柄の関係を表すものである。事実条件には二つの下位の用法がある。
 - [1] 発見：前件が動作、後件が状態を表す場合、前件（動作）がきっかけとなって、後件（状態）を発見したという意味となるもの。
例：窓を開けたら、雪が降り出した。
 - [2] 時間的順序：前件の事柄が成立した後、後件の事柄が起きるものを本研究では時間的順序を呼ぶことにする。
例：空港に着いたら、連絡します。
- (5) 習慣：現在及び過去の反復的事態や個人の習慣を表すもの。
例：休みになれば、いつも映画を見に行く。
父は東京へ行ったら、いつもお菓子を買ってきてくれました。

5. 文法テスト

5.1 文法テストの対象者

文法テスト¹の対象者はハノイ国家大学外国語大学・ハノイ大学の日本語学習者である。また、日本語学習者の結果を客観的に考察するために、本研究では、ハノイに

住んでいる日本語を母語とする日本人にも文法テストをやってもらう。詳細に関しては以下の通りです。

グループ別	日本語レベル ²	日本語習得年数	人数
グループ①	初中級	1.5年～2年	20
グループ②	中級	2.5年～3年	20
グループ③	上級	3.5年以上	20
グループ④	ハノイに住んでいる日本語を母語とする人 (教師：5人、会社員：10人、主婦：5人)		20

5.2. 文法テストの実施手順

文法テストの実施手順としては、学習者が日本語の文を読んで、「タラ」「バ」を選択する23の問題で、「タラ」「バ」を重複して選択することもできる。文法テストは、国家大学の場合は授業のあと、調査用紙を配布し、学習者が全て記入し終わるまで時間を与えた。ハノイ大学の学生及び日本語母語話者の場合は、全部インターネットを通じて、文法テストを解答してもらう。

5.3. 文法テストの内容

文法テストの構成は本研究で扱われているそれぞれの「タラ」「バ」の用法を取り上げて、問題数を設問した。問題の数は教科書によく出題される頻度及び学習者が間違いやすいことから設問された。詳細は以下の通りである。問題例文は日本語教科書によく出る例文を参考して、出題した。詳細的な問題例文は以下の通りである。

「タラ」「バ」に関する用法	問題数	問題番号
① 恒常条件	5問	問4,6,7,8,9
② 仮定条件	4問	問10,12,14,21
③ モダリティ・制約条件	7問	問3,11,13,16,17,22,23
④ 文体	1問	問20
⑤ 事実条件・確定・習慣	6問	問1,2,5,15,18,19
合計	23問	

¹文法テストの一部分はスニーラット (1999) を参考したものである。

²本研究では、学習者のレベルは日本語学習年数を基準として判定する。

適切なものを選んでください。どちらも正しい場合は、両方を選んでください。

1. 今朝、ランさんの家を (1. たずねたら 2. たずねれば) 留守だった。
 2. 教室に (1. 入ったら 2. 入れば) 授業が始まりました。
 3. 田中さんが (1. 着いたら 2. つけば) 私を呼んでください。
 4. 4月に (1. なったら 2. なれば) 桜が咲きます。
 5. 春が (1. 着たら 2. 来れば) 暖かくなります。
 6. 2に3を (1. 出したら 2. 出せば) 5になります。
 7. パソコンを (1. 買ったら 2. 買えば) 仕事が早くできます。
 8. 水が100度に (1. なったら 2. なれば) わきます。
 9. スーパーへ (1. 行ったら 2. 行けば) 何でも売っています。
 10. (1. 安かったら 2. 安ければ) 買います。
 11. 先生が (1. 着たら 2. 来れば) 私に知らせてください。
 12. この薬を (1. 飲んだら 2. 飲めば) 病気が治るでしょう。
 13. 郵便局へ (1. 行ったら 2. 行けば) 切手を買ってください。
 14. あなたがピクニックに (1. 行ったら 2. 行けば) 私も一緒に行きます。
 15. 7時に (1. なったら 2. なれば) 授業が始まります。
 16. タバコを (1. 吸ったら 2. 吸えば) 必ず火を消してください。
 17. 家に (1. 帰ったら 2. 帰れば) 勉強しなさい。
 18. 父は外国へ出張に (1. 行ったら 2. 行けば) よくお土産を買ってくれました。
 19. 母は天気が (1. よかったら 2. よければ) 毎朝公園を散歩しています。
 20. 不明な点が (1. あったら 2. あれば) お問い合わせください。
 21. お金が (1. 借りたかったら 2. 借りたければ) 銀行に行ったほうがいいです。
 22. 大阪へ (1. 旅行したら 2. 旅行すれば) 友達の家泊まろう。
- 明日 (1. 晴れたら 2. 晴れば) ピクニックに行きましょう。

6. 調査結果

6.1 母語話者の文法テストの全体的傾向

母語話者の全体的傾向は以下の通りである。

90%~100%が「たら」と答えた問題 (問1・2・3・11・13・16・17・22) 70%~90%が「どちらも」と答えた問題 (問4・5・7・9・10・12・15・20・21)

①「たら」「ば」「どちらも」の三種類の答えに分かれた問題 (問6・8・14・18・19・23)

①は、事実条件とモダリティー制約がある仮定条件の問題に限られている。ただし、同じモダリティー制約のある問題であ

っても、問23だけは「たら (75%)」「ば (10%)」「どちらも (20%)」に分かれた。②の70%以上が「どちらも」と答えた問題は9問ある。③は、答えが分かれたものですが、三種に均等に分かれたのではなく、「たら」「どちらも」を選んだ母語話者が多い問題と、「ば」「どちらも」を選んだ母語話者が多い問題があり、三種に均等に分かれた問題は14だけであった。母語話者の間でなぜこのような偏りが生じるのかを追求することも必要だと考える。しかし、本研究では、ベトナム語を母語とする日本語学習者の結果を中心に分析するので、母語話者の結果を詳細的に分析しない。

文法テストでは、「たら」「ば」の使い分けにおいて、母語話者が一方を選択し

たのは、①90%~100%が「たら」と答えた問題だけであった。他の問題については、「たら」を使う母語話者も「ば」を使う母語話者もいる。①90%~100%が「たら」と答えた問題の具体的な用法は、事実条件（問1, 2）とモダリティー制約のある問題（問3, 11, 13, 16, 17, 22）である。この結果をみると、日本語学習者が「たら」「ば」の選択について、学習第一段階としては、母語話者が「たら」だけを選択した問題が区別で切れれば良いのではないかと考えられる。

6.2 学習者の文法テストの全体的傾向

ベトナム語を母語とする日本語学習者の使用傾向は母語話者のと異なっている。

1) 学習者の解答には、母語話者のように90%以上が一つの答えに集中するという問題はなかったが、問1, 4, 10, 11, 17については85%が「たら」と答えている。問1は事実条件、問4は恒常条件、問10は仮定条件、問11と問17はモダリティー制約の問題である。その他の問題、「たら」「ば」「どちらも」の三つに分かれている。

2) 母語話者の解答には、70%以上が「どちらも」と答えた問題が9問があるが、学習者野場合は、「どちらも」という解答が少なく（問23, 問19）「たら」「ば」のどちらか一方を選択する傾向がある。

1) の結果は「事実の用法とモダリティー制約のある条件、恒常条件、仮定条件については、「たら」を使用する」という規則を十分理解されていない学習者もいる（25%）。2) の結果からは、「たら」「ば」の用法には重複する部分があり、どちらも使用できるという点についての理解が不十分で、どちらかをい選択しなければいけないと考えている可能性があるかと判断した。

6.3 文法テストのレベル別の結果

今回の文法テストで、母語話者の答えが90%~100%一致した問題（6.1の①）は事実条件（問1.2）、モダリティー制約のある問題（問3・11・13・16・17・22）のみであった。ここでは、母語話者の90%~100%が「たら」と答えた問題だけを取り上げて、もう一度詳しく学習者の日本語レベルと日本語文法テストの結果を検討する。母語話者の答えが90%~100%一致した問題についてのみ、母語話者の解答を「正答」とし、学習者の答えがそれと違う場合「誤答」と呼ぶことにし、母語話者の答えが一致しない問題については、「正答」「誤答」の判断をしないという立場をとる。母語話者の90%~100%が「たら」と答えた問題は、以下の3種類である。(A) (B) はどちらも事実条件であるが、(A) は「前件の行為をした結果、後件の事態に気がついた/分かった」というもので、特に「発見」と呼ばれているものである。(B) は、前件に続いて、後件の事態が起きるといった時間的な順序を表している。(C) はモダリティー制約のあるものである。

(A) 事実条件（発見の用法）

問題1：今朝、ランさんの家を（

1. たずねたら
2. たずねれば）留守だった。

(B) 事実条件（時間的順序を表す用）

問題2：教室に（1. 入ったら
2. 入れば）授業が始まりました。

(C) モダリティー制約のある問題

問題3：田中さんが（1. 着いたら
2. つけば）私を呼んでください。

問題11：先生が（1. 着たら
2. 来れば）私に知らせてください。

問題13：郵便局へ（1. 行ったら
2. 行けば）切手を買ってください。

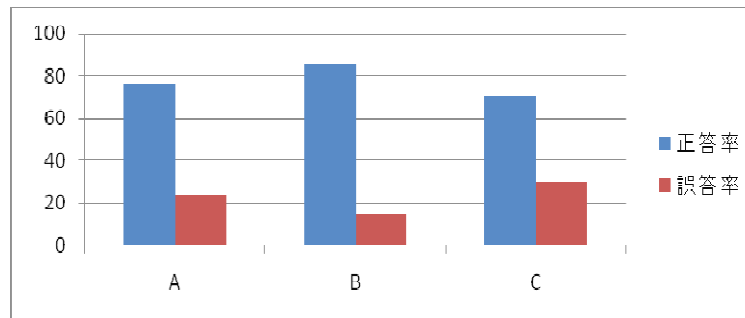
問題17：家に（1. 帰ったら
2. 帰れば）勉強しなさい。

問題 2 2 : 大阪へ (1. 旅行したら
2. 旅行すれば) 友達の家に泊まろう。

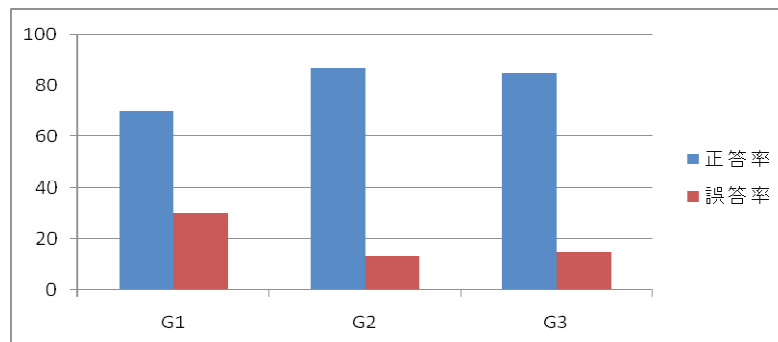
(A)、(B)、(C) の問題に関して、学習者の日本語レベルと正答・誤答の関係をグラフにすると、以下のようになる。

グラフ 1 : 問題種類別の正答率

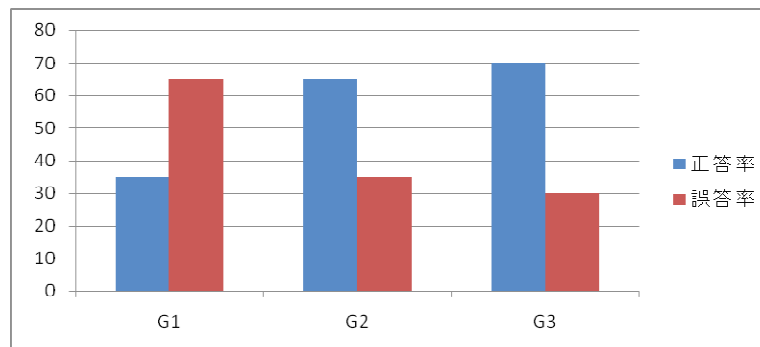
(A) 事実条件 (発見)



(B) 事実条件 (時間的条件)



(C) 仮定条件 (モダリティ制約)



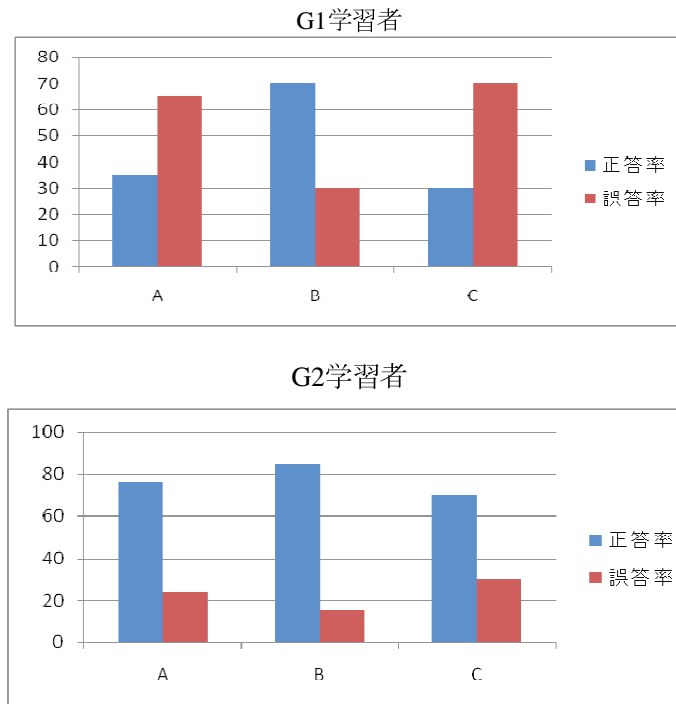
上記のグラフから次のようなことがわかる。

1) (A) 事実条件（発見の用法）は、G1の場合は、正答率が低いが、G3と比べて、G2のほうが正答率が高い。

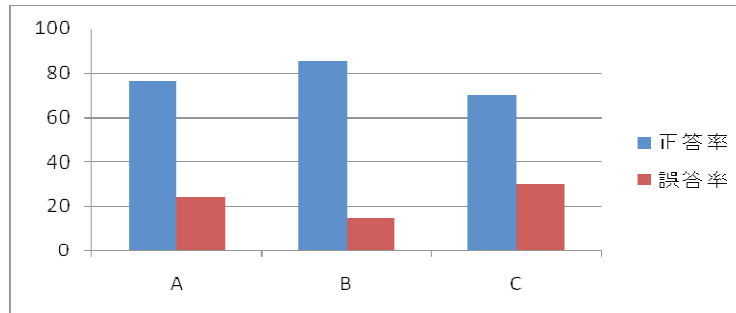
2) (B) 事実条件（時間的順序を表す用法）とモダリティー制約のある問題に関しては、G1の場合は、時間的順序を表す用法について、誤答率が少なく、モダリティー制約の問題には誤答が多い。G2の場合は、時間的順序を表す用法には、ほとんど誤答がなかったが、モダリティー制約の問題には、誤答があった。G3の場合は、正答率が高くなり、誤答は少なくなるが、G2と同じように、モダリティー制約の問題には誤答があった。

(A) 発見の用法において、G2が突出して正答率が高い理由は他のテストやインタビューの結果を合わせて検討しなければならないのであるが、発見の用法以外は「日本語のレベルがあがれば、習得が進む」という一般的な結果を示唆していない。要するに、上級レベルの学習者でも既習した文法項目でも十分習得されているとは限らない。(B) 時間的順序を表す用法については、G1からG2にレベルが上がっても正答率はあまり変わらない。(A) (B) については各1問と問題数も少ないので、今回の文法テストに限ってはこのような結果であったとしかいうことができないが、結果は興味深いものとなっている。問題数を増やして、再度調査し同じ結果が得られるかどうかを検討するのは今後の課題である。

グラフ 2 : 日本語のレベル別の正答率



G3学習者



今回の文法テストは、「たら」「ば」のどちらか、あるいは両方を選択するという問題形式であるので、「たら」「ば」のどちらかを選んでも正答率40%に近くなることが考えられる。そこで、正答率が高く

なるのはどの段階であるかに注目してみると、このグラフのような表にまとめた。仮に、正答率が70%を超えた段階に注目し、順番を並べ替えると表2のようになる。

表2. 学習者の (A) 事実条件 (発見) (B) 事実条件 (時間的順序)
(C) 仮定条件 (モダリティー制約あり) の習得傾向

	G1	G2	G3
A	35%	80%	76%
B	70%	87%	85%
C	30%	65%	70%

この3種類の用法に限って考察すると、(B) 事実条件 (時間的順序) → (A) 事実条件 (発見) → (C) 仮定条件 (モダリティー制約あり) の順で習得が進んでいる可能性があると言える。

7. 文法テストの結果について

文法テストの結果から、明らかになったのは、以下の点である。

(1) 「たら」「ば」の選択傾向について。

1. 母語話者は、事実条件と仮定条件のうちモダリティーのある問題について、90%~100%「たら」を選択した。学習者

は母語話者のように90%以上が一つの答えに集中するという問題はなかった。

2. 母語話者の解答には、70%以上が「どちらも」と答えた問題が9問あるが、それに比べると、学習者の解答には、「どちらも」という解答が少なく、「たら」「ば」のどちらか一方を選択する傾向がある。どちらも使用できる場合があるという点について、学習者は理解が不十分で、どちらかを選択しなければ行けないと考えている可能性が示唆される。

3. 学習者は「たら・ストラテジー」を使用している可能性もあるが、文法テストの結果ではどの問題でも「たら」を選択しておくという傾向は見られなかった。

(2) 習得過程に関して

1. 事実条件（発見）はG1の場合は、正答率が低い、G3と比べて、G2のほうが正答率が高い。また、事実条件（時間的順序を表す用法）とモダリティー制約のある問題に関しては、G1の場合は、時間的順序を表す用法について、誤答率が少なく、モダリティー制約の問題には誤答が多い。G2の場合は、時間的順序を表す用法には、ほとんど誤答がなかったが、モダリティー制約の問題には、誤答があった。G3の場合は、正答率が高くなり、誤答は少なくなるが、G2と同じように、モダリティー制約の問題には誤答があった。要するに、上級レベルの学習者でも既習した文法項目でも十分習得されているとは限らないと言えるでしょう。

2. 事実条件（発見）、事実条件（時間的順序）仮定条件（モダリティー）の三種類では、事実条件（時間的順序）→事実条件（発見）→仮定条件（モダリティー制約あり）の順で習得が進んでいる可能性があると考えられる。

3. それぞれの学習者の習得状況には、個人差があるということが分かった。例えば、上級レベルになっても、初級レベルの学習者があまり起こさない誤用を起こしてしまったとか、逆に、初級レベルの学習者でも、上級レベルの学習者がよく起こした誤用を起こしていないとかなどである。この個人差を追求するのはこの文法テストだけでは、十分に反映されないので、フローアップインタビューを実施しなければならない。この問題を今後の課題とする。

本調査の結果がベトナム語を母語とする日本語学習者の日本語教育に少しでも役に立てば幸いである。具体的にどのように日本語教育に応用していけばよいかについては、今後の課題としたい。

主な参考文献

- [1] 益岡隆志, 条件表現の対照, くろしお出版, 1993.
- [2] [宮島, 日本語類義表現の文法(下), くろしお出版, 1996.
- [3] [蓮沼昭子, 条件表現, 日本語文法セルフマスターシリーズ7, くろしお出版, 2001.
- [4] 野田尚史, 日本語学習者の文法習得, 大修館書店, 2002.
- [5] 稲葉みどり, 日本語条件文の意味領域と中間言語構造 - 英語話者の第2言語習得過程を中心に, 日本語教育, 75号, 1991.
- [6] 子柳かおる, 条件文習得におけるインストラクションの効果, 第二言語習得過程を中心に, 2号, 1998.
- [7] 堀恵子, 韓国語母語話者を対象とする日本語条件文の習得研究, 言語と文明, 麗澤大学大学院集言語教育研究科, 2003.
- [8] ソルヴァン, 日本語学習者における条件文習得問題について, 条件表現の対照, 2006.
- [9] スニーラット, タイ語母語話者による条件表現の習得, 言語文化と日本語教育, 18号, 1999.
- [10] 迫田久美子, 日本語教育に生かす第二言語習得研究, 2002.

Thực trạng sử dụng cách nói điều kiện 「tara」 「ba」 ở người Việt Nam học tiếng Nhật

Trần Thị Minh Phương

Khoa NN&VH Phương Đông

Trường Đại học Ngoại ngữ, Đại học Quốc gia Hà Nội

Đường Phạm Văn Đồng, Cầu Giấy, Hà Nội, Việt Nam

Bài báo này khảo sát về thực trạng sử dụng cách nói điều kiện 「たら/ tara」 「ば/ ba」 của người Việt Nam học tiếng Nhật. Để nắm được thực trạng sử dụng, khuynh hướng lựa chọn và trình tự thụ đắc, tác giả đã tiến hành điều tra bằng bài kiểm tra ngữ pháp và thu được kết quả như sau: (1) Người Việt Nam học tiếng Nhật có khuynh hướng lựa chọn khác với người bản ngữ. (2) Người học ở trình độ tiếng Nhật cao chưa chắc đã nắm chắc được những cách dùng đã học. (3) Khuynh hướng thụ đắc của người Việt Nam học tiếng Nhật là: Điều kiện thực (Trình tự thời gian) → Điều kiện thực (Phát hiện) → Điều kiện giả định (Có hạn chế về dạng thức trong câu). (4) Trong quá trình thụ đắc có sự khác biệt ở mỗi người học.

Từ khóa: 「tara」, 「ba」, khuynh hướng lựa chọn, thực trạng sử dụng, người Việt Nam học tiếng Nhật.